

2017/3/26

## (日々雑感 61) 修正版



「なんやの、おっちゃん。何が男の復権やねん。あほ、ちゃうか。時代錯誤のアナクロも甚だしいわ。今更亭主関白してどないすんねん。あんた、アナウヨやな。アナログで右翼。さっさと死ねや！」

投稿の後、思った通り、間髪入れずにボコボコに叩かれました。男女問わず。

話が、急展開して終わったせいもあってだろうと思いますが、理性的、論理的な批判、批評というより感情的、反射的なものが大半でした。

しめしめ、と思いました。

何がしめしめ、なのかというと、まず、論理、論学に則った物でない、思い込みレベルの話である可能性であることが確認出来たことと、この件について更に詳しく話す新たな機会の必然性が得られたからです。かなり予期した、筋書き通りの展開です。

何しろ一気に話すには長すぎて聞いている方が、イヤになると思ったのもですから。

戦前戦後を通じて女性は弱者。男性は強者。男性が強かったために国民、なかんずく女性が不幸になった。あるいは今でも下に押さえ込まれて不幸で有り続けている、と言うのが現代の一般的認識です。

話はちょっと変わりますが、1, 2年前の新聞記事で、単身赴任の自衛官が、週末に帰宅し、日曜日の夕方単身赴任先に戻る折に、奥さんも2階に居た子供達も見送りに出てこなかったかなんかで切れてしまい、突然、ガソリンをあたりに振りまいて、火をつけ、結果奥さんは助かったものの、実の子二人が焼け死んだ事件があったと記憶しています。

その時は「なんていう事を！」と自衛官の父親に対して憤ったものですが、その後、一体何でそこまでするに至ったのか？一体何があったのか？が疑問として残りました。

そこで、目を引いたのが、奥さんがお見送りに出てこなかったという文言でした。

何故その文言に目が行ったかということ、まだ本宅に居て、結婚していた頃、料理をしようが買い物に行こうが、掃除をしようが、行ってきますと言おうが、同居家族は全くのなしのつぶて。ご苦労様もお疲れ様も大丈夫？も一切無かった過去を思い出したからです。

その時、自分はどんな気持ちになったか？

単身赴任をして一生懸命働いて帰ってきた。たまの休みで、くつろぎたい。しかし、何故かそうならない。時間はドンドン過ぎて、また単身赴任の一人部屋に帰らなくてはならない。せめて最後に「ご苦労様、気をつけて帰ってね」の一言でもあれば・・・

しかし、逸れすらもなかった。2階に居る子供達も下りてすらこない。奥さんと子供は仲が良い。自分はこんなに働いているのに、蚊帳の外。

そして切れた。のでは・・・

「おれは、給料運搬車ではない。ふざけんな！」

横暴な男があるいは夫が女性や妻に暴力を振るう家庭内暴力、すなわち DV (ドメスティックバイオレンス) の報道。おおよそ家庭内暴力というと、これら男性が女性に振るう「物理的」「腕力的」な暴力の記事が大半です。

しかし、本当なのでしょうか？本当に公平な記事掲載量なのでしょうか？

無論女性が男性に暴力を振るうケースが本当は多いのではないかと知っているのではありません。言いたいのは女性が男性に、奥さんが旦那さんに日常的にふるう「心理的な暴力」のことです。立証は難しいのでなかなか事件化しないし、記事にもなりません。

「しかと、さげすみ、陰口」などなど。所謂「男のメンツと沽券」を徹底的に潰す行為。男が女性に気持ちがあり、しっぽを振っていることを良いことに、それを徹底的に利用しまくる策術。

本当に男性に対して女性は弱いのでしょうか？ひょっとしたら弱いはずの女性は、強いはずの男性の「陰の実行支配者」になっていないのでしょうか？

古今東西の歴史を見て、本当に頭の良い奴は、大統領や、書記長などになって決して表に出たりはせず、陰で糸を引くフィクサーになっていたことは歴史の明白な事実です。現にそのフィクサーのストーリーから逸脱した行動を取り始めたリンカーンやケネディーは暗殺されています。現大統領のトランプさんも危ないかもしれません。しかも、その陰の人の名は決して歴史教科書に出ることは無かったのです。有名という「名」より実利という「実」を取ったのです。

今の女性がそこまで奸計に長けているかどうかは、定かではありませんが、少なくとも世間一般で言う「現時点での」弱者、強者の通常概念は一度疑ってみる必要があるような気がします。

例えば、親に対して子は本当に弱者なのか？従業員は経営者に対して本当に弱いだけなのか？弱者である個人情報は一切出さないが、強者である国家の機密は全部さらけ出せというのは、公平なのだろうか？そして女性は男性に対して本当に弱い存在なのか？

相手の領域には土足でどこどこ踏み込むが、一步でも自分の領域に入ろうものなら上へ下への大騒ぎとかも。

もちろん、社会的地位においてではなく「実質」「実態」「実行」の陰の面においてです。

「弱者の横暴」

ふとそんな言葉が浮かびました。強者の反省しすぎと弱者の立場の乱用。

もちろんこれは、最先進国に限っての話で、発展途上国、なかんずく極貧国には全く当てはまらないことは言うまでもありません。

戦前の経験と反省から、強者は弱者にもてる力をふるってはいけない。押さえなくてはいけないと無意識に教わったような気がします。公は私に力をふるってはいけない。介入してはいけないし押さえなくてはいけない。弱者保護と滅私奉公（私利を抑えて公に力を奉る）の排除。

しかし、それが行き過ぎていないだろうか？弱者であることを声高に唱えて、その立場を限度以上に利用したり「私」にだけ専念することを「自分らしく」と言う決まり文句で逃げ替え、公德心をないがしろにしたり「公」を顧みないことの言い訳にしていやしないだろうか？そんな気がしてならない昨今なのです。

あまりにも方向として右に振れすぎたために、その反動で今度は左の方向に振れすぎている。著しくセンターから離れている。そんな感じがするのです。敢えて反対の力を用いないと、どこか遠くへ行ってしまうような気がして、とても心配なのです。